

メールは utsunomiya@yomiuri.com

第2回

大谷石 ルネサンス

巨大な地震が、今も耳に残っている。今年2月3日、午前10時過ぎ。宇都宮市大谷町の主婦小久保里絵さん39は、自宅の2階で「大地震か」と、身構えた。庭で縄跳びをしていた子供たちが部屋に飛び込んでくる。「お母さん、木が動いているよ」。自宅北側にある採掘場の跡地で大規模な陥没が発生し、周辺の地表も滑り動いたのだ。その日は夕方まで、陥没で巻き起こった黄色い土煙が辺りを包み、車や屋根は真っ白に砂をかぶった。幸いにも周辺の住民や住宅に被害は及ばなかった。だが、不安は募る。「また起きたらと思うと心配。でもここに住んでいくと決めたら、子供たちにも陥没のことを教えて、備えないと」。小久保さんは小学生の長女と長男に、徐々に大谷の歴史を教えて、共存の方法を見いだすつもりだ。

採掘跡 安全調査を徹底

2月にも陥没：観光活用へ「共存」図る

今年2月に陥没した採掘跡地の周辺。利活用して共存するには、安全性の担保が求められる（今年9月、本社へリから）＝安川純撮影



わずか18時間 今年2月の陥没は、約500平方メートル、最大の深さは約6メートル。6回目の陥没が1997年以降にあり、市の調べでは16年ぶりの陥没。これまでの陥没が、1か

月、数か月前から予兆の振動があったのに対し、今回は最初の振動からわずか18時間で陥没した。このため、県と市、大谷石材協同組合でつくる「大谷地域整備公社」は、徹底的な調査を続けた。その結果、採掘を始めた時期の記録

が残り、柱となるよう掘る。折れて陥没したと、類似空間は、現時点で確認されていない」と、ほかの採掘跡地でも同種の事故が起る恐れは少ないと結論づけた。県と市の3者は現在も、週一回、異変がないか1帯の巡回を続ける。採掘跡地を観光などに活用するには、安全性の担保は、

採掘跡地の地下空間について研究している宇都宮大学部の清水隆文准教授（岩盤工学）は、「地下空間は一年を通して温度が13度ほどで冷房効率は非常に良い。神秘的な雰囲気もあって、放置するのはもったいない」と、利活用すべきだと訴える。ただ、強調した。「相手は自然。採掘跡はトンネルなどと違い、人工的な支えがない素掘りの状態だ。長い間かけてできた地形のバランスを人間が崩しているからには、継続的に安全性を調査しながら活用していかなければならない」。市は大谷地区内の126か所に地震計を設置し、公社が24時間観測している。揺れがあれば、住民や観光客に避難勧告を出すなどの備えを続ける。（清武悠樹）

大谷地区には、約250か所の採掘跡地があるとされる。宇都宮市が把握しているだけで、過去の陥没事故は少なくとも6回。地表の重みが偏ったり、水分で緩んだりして落盤し、最も規模が大きかった1990年には、広さ約7500平方メートル、深さ約30メートルの穴が開いた。



今年2月の陥没現場（大谷地域整備公社提供）

震災で倒壊「工法」のせい？

県によると、東日本大震災で発生した県内の災害廃棄物約22万トのうち、約4割が大谷石だった。大谷石でつくられた崩れや蔵が崩れ、石材としての耐震性でも、「負」のイメージが突き付けられた。

大谷石は、大理石や御影石などと比べて柔らかい石材とされる。しかし、大谷石の文化的価値の普及活動を行う識者らによ

るNPO法人「大谷石研究会」（宇都宮市）は、震災で石崩れが崩れたこと、大谷石の柔らかさは無関係との立場だ。「石材に十分水を含ませずにモルタルで接着して積んだために起きた」とみている。セメントと水を混ぜたモルタルは、石と石をつなげる接着剤。大谷石は吸水性が高いため、乾燥した状態でモルタルを塗る



県職員らは週に1回、今年2月の陥没現場を見回る。一般は立ち入り禁止だ（10月15日、宇都宮市大谷町で）



■きょうの栃木版から
26 那須塩原でハーフマラソン
（写真は男子4連覇の伊藤達志さん）

26 ブレックス 競り勝負
26 栃木SC 長崎に敗れる
27 那須町で「泣き相撲」

27 スケート場 営業始まる
27 おくやみ
28 ひろば「テーマ」夢

日光美酒

杉並木

飯沼銘醸 0282-92-2005